

2 大学で共催するFDセミナーの開発と将来展望 ～「授業について考えるランチセミナー」の企画・運営を通して～

吉田 博¹⁾、飯尾 健¹⁾、塩川奈々美¹⁾、杉田郁代²⁾、高畑貴志²⁾

1) 徳島大学高等教育研究センター 2) 高知大学学び創造センター

1. はじめに

徳島大学と高知大学では、2022 年度からオンラインによる FD セミナー「授業について考えるランチセミナー」を協同で企画、開催している。授業について考えるランチセミナー（以下、セミナー）は、8 月と 3 月を除く毎月、第 2、第 3 木曜日の昼休みに、授業実践に関するテーマを 1 つ決め、その解説やティップスの紹介、実践事例の共有など、各テーマ 2 回ずつ異なる内容で 1 年間に全 20 回実施している。セミナーは SPOD 加盟校に Zoom で配信し、気軽に参加できることを特徴の 1 つとしている¹⁾。2 大学が 1 つのセミナーを共催することで、テーマや紹介する事例が充実し、両大学で FD を担当する事務局が、セミナーの案内や問い合わせの対応を行うことで、特に当該大学の参加者の増加につながっている。

本発表では、2022 年度のセミナーについて、主に徳島大学と高知大学の参加者の傾向、セミナー終了時に実施しているアンケートの考察を行い、今後のセミナーの改善につなげる。

2. セミナーの参加者傾向

2.1. 2021 年度の参加者との比較

表 1 は、セミナーを共催する前年度の 2021 年度と共催した 2022 年度の参加者数について、スタッフ及び登壇者を除く（登壇者であっても他の回に参加した方は除いていない）実人数について、所属機関別に表している。これによると、高知大学の参加者数が約 6 倍に増加していることが分かる。2021 年度も高知大学にセミナーは配信し

表 1 セミナーの参加実人数（人）

年度	徳島大学	高知大学	その他	全体
2021	102	7	39	148
2022	107	43	28	178

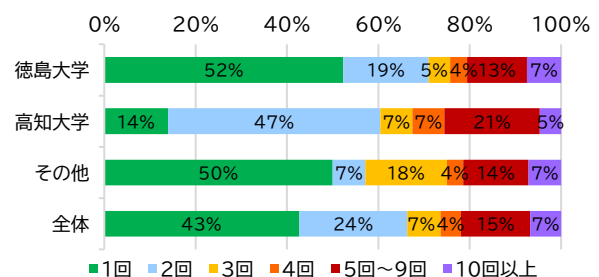
ていたが、共催することで、高知大学の年間の FD 計画の中に盛り込まれたことや高知大学の担当者が学内への周知を行ったことで、高知大学の教職員にとって身近な FD として位置づけられた可能性がある。

2.2. 1 人当たりの参加回数

次に、図 1 に 1 人当たりの参加回数について、所属機関別に示している。これによると、高知大学の参加者は、1 回のみの参加者の割合が他の大学等と比較して少なく、2 回参加している参加者も 47% であり、最も多くなっている。この要因として考えられるのは、高知大学では新任教員研修の中で、SPOD 等の FD プログラムに 4 つ以上参加することを義務付けており、セミナーもその対象の 1 つとなっていることである。セミナーは 1 回あたり 45 分であることから、一月の 2 回に連続で参加することで、SPOD の FD プログラム 1 回分の参加とみなしている。このような組織的な位置づけも参加の動向に影響を与えると考える。

2.3. 職種別の違い

最後に、参加者の職種を表 2 に示している。これによると、参加者の 9 割以上が教員である。セミナーのテーマが授業実践に関するものであるから、当然のことといえよう。一方、徳島大学の



※1 人当たりの参加回数の平均値は、徳島大学 2.89 回、高知大学 3.70 回、その他 3.11 回、全体 3.12 回であった。

図 1 1 人当たりの参加回数

表2 セミナーの参加者の職種(人)

	教員	職員	学生	その他	合計
徳島大学	82	6	19	0	107
高知大学	41	1	0	1	43
その他	27	1	0	0	28
合計	150	8	19	1	178

み学生・大学院生が19名(約18%)参加している。このうち15名は、大学教育について学習する徳島大学のある教養教育科目の受講生であった。また、このうち13名が「授業時間外学習」をテーマとした月に参加しており、担当教員からもセミナーに関する情報提供がなされていたことから、このテーマに関する理解を促進するために、セミナーを活用していることが分かる。このように特定のテーマについては、学生自身の学習につなげる機会となっていることが分かる。

3. 参加者アンケート

セミナーでは、終了直後に参加者を対象にwebアンケートを実施している。2022年度は延べ282名から回答を得ている。4件法によるセミナーの満足度や役立ち度等のデータについては、齋藤ほか(2023)を参照されたい¹⁾。ここでは、自由記述のうち「本セミナーに参加して良かった点・有益であった点などがあればお書きください。」という設問の記述内容を分析する。アンケートの回答のうち、本設問への記述があったのは109件であり、これらの記述を内容に応じて項目別に分類し、表3に示している。表3より、最も多くの参加者が記述していた内容は、「十字モデルについて理解しなかったので、勉強になりました。」などのテーマに関連する理解が促進されたこと、

表3 アンケートの記述内容

項目	記述数
テーマに関する理解の促進・新しい気づき	48
具体例・実践例・操作方・ツールが知れた	19
ゲスト(教員・学生)の声が直接聞けた	17
自身の取組を振り返った・考えた	11
リラックスしてセミナーに参加できた	2
参加者の声を拾ってセミナーが進められた	1
感想・その他(設問の意図と合わない意見)	11
合計	109

新しい気づきがあったことである(48件)。この結果は、セミナーは気軽さを特徴の1つとしているが、充実した内容で、参加者にとって学びにつながることを目指しており、オンライン授業でのアクティブラーニングや評価方法、多様な学生への対応など、関心の高いテーマを取り扱っていることによると推察できる。続いて多かった意見が、「授業で活用できる具体的な実践例を紹介していただけるので、即時性のある研修内容でした。」のように、すぐに活用できる情報が得られたという意見(19件)、また「学生さんの生の声や、先生方の生の声が聞けて、大変有意義でした。」のように、実際の現場の意見を直接聞くことができるというものである(17件)。これらの意見についても、セミナーの特徴(昼食時、オンライン、45分間等)を鑑みて、より実践的で具体的な内容を取り扱うことやゲストスピーカーを多用することを意図したことによる結果であると考えられる。また、「onedriveで共同編集できるのは試してみようと思います。」のように、参加者自身の今後の取組について言及したり、考えている意見が11件挙げられていた。

4. まとめと今後に向けて

2大学で共催する「授業について考えるランチセミナー」について参加者の傾向やセミナー直後のアンケートの記述内容を整理し考察した。大学によるセミナーの位置づけが参加者の動向に影響を与えることが分かった。また、セミナー直後のアンケートからは、セミナーの企画者が意図した成果も一部で確認することができた。今後は、参加者の参加動機やセミナーの受講の仕方による違いが、セミナー参加後にどのような意識や行動の変化につながっているのかを調べるのが考えられる。これらの結果をもとに、より充実したセミナーを開発していくことができる。

参考文献

- 1) 齋藤隆仁・吉田 博・塩川奈々美・飯尾 健(2023) 「2022年度徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告」、大学教育研究ジャーナル、20、75-99。